2014年度　　BA

国　語

注　意

1. 問題は全部で13ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ○ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

美を生み出すのみならずそれを運用していく職能としてデザイナーは、日本ではいつ頃から動きはじめたのであろうか。僕は、今日のデザイナーと似ている職能、あるいは才能として、室町時代前後の阿弥衆(同朋衆)を思い浮かべないわけにはいかない。

阿弥とは、やや乱暴にたとえるなら、優れた技能や目利きの名称に付す「拡張子」[1]のようなものだ。最近は、そのデータがどのソフトウエアでできたかを表記する目的でデータの名称の最後に「.doc」などと付す。意味や機能は異なるが、ニュアンスとしてはこれに似ている気がする。だから室町以降の人の名前に「阿弥」と付されていたなら、「.ami」、なるほどその筋のソフトウエアを共有するアーティストか、と考えればだいたい遠からずの素性を理解できる。

「阿弥」は元々、浄土宗の一派である時宗の僧侶の法名に用いられていたものである。時宗の僧侶は合戦に同行する僧侶でもあった。武士が戦場で命を落とすようなことがあれば、すかさず念仏を唱え、浄土に旅立つための一連の始末を請け負っていたらしい。[A]、ただ戦に同道するだけで貴重な兵糧の世話になり続けるというのも不自然であり、[B]宗教方面のみならず、負傷者の手当や日常の世話、そして芸術諸方面の活動をも担うようになった。[C]僧門の人々は元来、芸能をよくしたことも「阿弥」という記号に独特の意味を含ませるきっかけとなったと想像される。

[D]技芸の才のある個人や一族がこの名称を用いたことで[I]がおこり、時宗の徒ではない者までもが阿弥を名のるようになった。有力な武家に[II]されて、芸術諸般や日常雑務を担っていた人々は「同朋衆」とも呼ばれるが、「同朋」という言葉が喚起するイメージよりも、今日、歴史上で美に関与した者としてすでに耳にしている技能者の名称をたどることでイメージの広がる「阿弥衆」をここでは用いてみたい。

文化というものは常に、時を制する力とつながり、また拮抗して呼吸している。それは武力であったり、経済力であったり、政治力であったり、ポピュリズムであったりするが、そういう力が、力であるゆえの穢れや毒を拭うように、感覚的な洗練とし

ての美を欲するのである。このような希求を文化の端緒というべきかどうかはともかく、倦まずたゆまずその要望に応え、美を供給していく役割を担う人々がいる。美に触れ続けるということは、時代の趨勢を作るパワーとは異なるイソウに、人間の感覚のときめきを生み出すもうひとつの中心があることを意識し続けるということである。美と感覚を交感させて日々を過ごすことと、時の力に請われてこれを供していくことの間には、必ず微妙な葛藤が生じてくる。時の力は自分たちの技や才能の発露をうながす土壌すなわちクライアントであるが、美をサハイする現場に精通する人々に培われてくる感覚は、常にクライアントの思惑を超えて過度に成熟する。この過度なる感覚の成熟や横溢をこそ文化と呼ぶべきかもしれない。阿弥衆の仕事に、自分が感じるそこはかとない共感は、この過度なる感覚のやり場に起因する微かなる葛藤と放蕩をそこに感じるからである。足利幕府であれ、資本主義のもとで君臨する企業であれ、［　Ⅲ　］を洗練されたイメージへと変容させて用いたいという希求に、半ば応え、半ばあらがうという状況を共有しうる立場として、僕はこれらの技能集団に直感的なシンパシーを感じるのである。

日本美術は、歌にしても書画にしても天皇や貴族のたしなみから発生しており、歌を詠むことも、それを料紙に書きつけることも、高貴な地位の人々が主役で、彼らが直接手を下してそれを行っていた。高い地位の家に生まれつき、得難い情報や知識を幼い頃から身につけて育った文化的エリートのみが実践できるパフォーマンスとして、美の世界は存在した。しかしながら、時代が下るにつれ、美を求める意志と、それを実践・具体化させる技能とが分離してくる。美を具体化できる能力は、地位や生まれではなく個人の生来の能力や特別な修練によるという認識が、徐々に一般化してくるのである。平安時代から鎌倉時代にかけて、高度な修練を積んだ宮大工や彫り師・絵師といった職人あるいはアーティストが美術シーンを牽引したのは、そういう流れにおいてである。しかし、室町時代の阿弥衆は、そうしたアーティストや職人の気質とはまたひと味異なる才能たちであった。つまり絵画や彫刻を生産するのみならず、その運用の仕方や配し方、すなわち「しつらい」を介して美を顕現させる才能が活躍しはじめるのである。

室町時代に確立した諸芸として、能、連歌、立花、茶の湯、築庭、書院や茶室の建築などがあげられるが、いずれも美的なオブジェクトを生み出すだけではなく、組み合わせ、制御し、活用する才能が諸芸を生き生きと走らせていく。つまり「もの」を作

るのみならず「こと」を仕組み、美を顕現させる職能たちが活躍しはじめる。遁世者という言葉があるが、美を差し出してその報酬で生きるということは、どの世においても社会の常道、まっとうな生業から逸脱した存在である。これは現代も同じことだ。(5)才能で生きるということは「固有名詞」として社会に立つということであり、その立ち方は才能単位でマチマチで、簡単に人に譲り渡したり、受け継いだりできるものではない。阿弥衆とはすなわち、固有名詞で室町文化のクライアント筋から、指名され頼りにされた才能なのである。純粋芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担うという性格上、僕は日本におけるデザイナーの始原をここに感じるのだ。

美という価値の運用が社会の中で、どう位置づけられたか、そしてそれをもとめる者、つくり出す者、見立てる者、調達する者の社会的な地位や立場、相互の関係がどうであったか。また、美の運用で獲得される(6)感覚資源は、いかなるかたちで伝承・保存され得たかなどは、今日の状況に対照させてみるととても興味深い。日本のデザイン史は、まさにこのあたりから書きはじめられなくてはならないかもしれない。

阿弥衆といえば、能の観阿弥と世阿弥、立花では立阿弥、作庭では善阿弥、美術品の目利きであった能阿弥などの名前がすぐにあがってくる。東山文化を確立した足利義政が重用した作庭師は善阿弥であるが、その出自はきわめて低い階層であったと言われている。しかし、築山を築き、水を引いて石を据え、そこに樹木を配する才能は、抜きんでたものを持っていたようで、作庭に異常な情熱を注ぎ続けた義政は、身分の賤しい善阿弥をことのほか大事に扱ったと伝えられている。病気の際には、薬を施すのみならず祈禱を行ってその回復を祈願したというから尋常の扱いではない。また良い仕事を完成した際には、身分に関係なくふさわしい褒賞を与えたそうだ。

一方で阿弥衆も、将軍の庇護を自覚しつつ、シタタかに仕事をしていたようだ。こんな逸話がある。ある時、相国寺の僧から梅と水仙の花の献上を受け、喜んだ義政は立阿弥に命じてこれを立てさせようとした。ところが、立阿弥は、病気と称して出仕を拒んだという。しかし義政はあきらめず、厳命を発し、ついには立阿弥を出仕させて花を立てさせた。結果として見事に花はしつらえられ、義政は立阿弥に相応の褒美を贈ったといわれる。実現したい美に対しては［ Ⅳ ］を押してでも通してしまう

義政の強引さは一貫しているが、将軍の命令を、いざとなれば花を立てられる程度の「病気」を理由に拒む立阿弥はなかなかの強者だったかもしれない。

東山文化とは、阿弥衆と、義政のような文化のディレクターとの、ダイナミックな [V] によって生み出されたものだと考えていいかもしれない。阿弥衆との積極的な交流を介して、義政を筆頭とする有力な文化リーダーたちの感覚もどんどん豊かになっていったのだろう。このあたりは今日のクライアントとデザイナーの関係にも似ている。出自に関係なく才能を有する者たちは、「阿弥」の付された名前を与えられ、文化の最前線にかり出される一方で、連歌の会などにも高貴な身分の人々に交じって出席を許されたりしている。

今日のデザイナーがネクタイをしないのは、自由や合理性ではなく、個の才能として存在を許される遁世者としてのポジショニングが、無意識に現代にまで引き継がれているからかもしれない。

（原研哉『日本のデザイン』による）

問一　傍線部(1)「拡張子」は、ここではどのような意味として用いられているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は [1]。

① 僧侶集団　② 名誉称号　③ 接続機能　④ 連想装置　⑤ 識別記号

問二　空欄 [A]、[B]、[C]、[D] に入れる最適な語句を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。ただし、同じものを二度使ってはいけない。解答欄は [2]、[3]、[4]、[5]。

① けだし　② つまり　③ しかし　④ とりわけ　⑤ おのずと

問三　空欄 [Ⅰ]、[Ⅱ] に入れる最適な語句を次の①～⑤から選び記号をマークせよ。解答欄は [6]、[7]。

① 逆用　② 悪用　③ 重用　④ 援用　⑤ 転用

問四　波線部a「イソウ」、b「サハイ」を漢字に直せ。**問四は解答用紙(その2)を使用。**

問五　傍線部(2)「過度なる感覚のやり場に起因する微かなる葛藤と放蕩」とはどのようなことを意味しているのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 8 。

① 美の現場に精通する阿弥衆の感覚は、常にクライアントの思惑を超えて過度に成熟する。一方、権力者は阿弥衆の能力を尊重しながらも結局は自分に従わせようとする。そうした間合を絶妙に調整しながら阿弥衆は美を提供していたということ。

② 阿弥衆は純粋な芸術家集団であり、プライドも高い。とりわけ権力者というクライアントに荷担し、免罪符としての美を提供することに対しては葛藤があり、時にはそうした要請を放置し、自分たちの思うままに放蕩を重ねることがあるということ。

③ 権力者は穢れや毒を拭うように、感覚的な洗練としての美を欲する。そうした欲求に応える役割を担うのが阿弥衆なのであるが、権力者の求める美と彼らの提供するものとの間には微妙なズレが出る。阿弥衆はそれを再調整して美を生むということ。

④ 阿弥衆とは権力者と距離を置き、美と感覚を交感させて日々を過ごす孤高の芸術家集団を意味する。それゆえ彼らの感覚は権力者というクライアントの思惑を超えた地点にある。にもかかわらず権力者に従わざるを得ないという葛藤があるということ。

⑤ クライアントの要望に沿って美を提供するのが阿弥衆の仕事であるが、そうした枠組みを超えて成熟、横溢する美的感覚がある。彼らは両者の折り合いを付けながら美を模索するが、時にはクライアントの要望に背き自己の思う方向で仕事をすることもあるということ。

問六　空欄 Ⅲ に入れる最適な漢字一字を本文中から選び記せ。**問六は解答用紙(その2)を使用。**

問七　傍線部(3)「そういう流れ」とあるが、それはどんな流れなのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 9 。

① 美を求める意志と、それを実践・具体化する技能とが分離し、次第に後者が重視されるようになってくる流れ。
② 文化を牽引する主体が貴族から武士へと変容し、阿弥衆が新たな文化の担い手として表舞台に登場してくる流れ。
③ 美を具体化できる能力は地位や生まれではなく、個人の能力や特別な修練によるという考えが一般化してくる流れ。
④ 従来文化的エリートに独占されていた美の世界が次第に開放され、多くの人たちがこれに関与するようになる流れ。
⑤ 文化的エリートのみが実践できるパフォーマンスとして存在していた美の世界が崩壊し、阿弥衆が台頭してくる流れ。

問八　傍線部(4)「ひと味異なる才能」とはどんな才能なのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 10 。

① 職人気質で個性の強い阿弥衆たちをしっかりと束ねて、集団を統率する才能。
② 美的なものを作り出すのみならず、それを効果的に演出、デザインする才能。
③ しつらいを重視した室町という時代に相応しい純粋芸術を産み出すような才能。
④ 権力者に従属することなく、専ら自分の思うままに美を顕現できるような才能。
⑤ クライアントの要望を咀嚼(そしゃく)し、それを取り込みながら美を顕現できるような才能。

問九　傍線部(5)「才能で生きるということは「固有名詞」として社会に立つということ」とあるが、それはどのようなことを言っているのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 11 。

① ここでの才能とは固有の能力を意味し、それに支払われる報酬で生きることはそのままその人の社会的な存在証明となっているということ。

② それまで芸術家集団だった阿弥衆が室町時代に入ると各構成員が個性を強めたため、権力者たちは個人を指名するようになったということ。

③ 美を差し出してその報酬で生きるということは、才能で生きるということに他ならない。その才能はそれぞれ個性的でまちまちだということ。

④ 室町文化のクライアントは阿弥衆が有するそれぞれの個性に値を付け、阿弥衆はその対価として美を顕現させる義務を負っているということ。

⑤ 純粋芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担っていた阿弥衆は、クライアントから指名され頼りにされ、その報酬で生きていたということ。

問十　波線部c「マチマチ」、d「シタタ(か)」にそれぞれ漢字をあてると最適なものはどれか。次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。

c 「マチマチ」解答欄は 12 。

① 町　町　② 待　待　③ 区　区　④ 末　末　⑤ 様　様

d 「シタタ(か)」解答欄は 13 。

① 堅　か　② 硬　か　③ 難　か　④ 固　か　⑤ 強　か

問十一　傍線部(6)「感覚資源」のここでの意味として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 14 。

① 美を顕現させる職能たちを見出し、それを指名し報酬を与える権力者の美的感覚。
② 純粋な芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担っているという誇りと尊厳。
③ 美的なオブジェクトを生み出すだけではなく、組み合わせ、制御し活用する才能。
④ 美を求める者、つくり出す者、見立てる者、調達する者の地位や立場、相互の関係。
⑤ 不断に美的なものと接触、交感することを介して磨き上げられ培われた美意識や文化。

問十二　空欄 Ⅳ に入れる最適な語を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 15 。

① 牛車　② 口車　③ 火車　④ 力車　⑤ 横車

問十三　空欄 Ⅴ に入れる最適な語を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 16 。

① 共同幻想　② 時代感覚　③ 美のしつらい　④ 文化的エリート　⑤ 美意識の交感

問十四　現代のデザイナーがネクタイをしない理由の根底にどういった意識があると筆者は考えているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 17 。

① 阿弥衆の末裔として美を顕現させる職能に携わっているという伝統意識。
② 組織に従属して仕事をすることに対する拒否と職人としての強い自尊心。
③ まっとうな生業から逸脱した存在という自覚と自己の才能に対する自負。
④ クライアントへの従属と拒否とが入り交じった微妙な感情と不断の葛藤。
⑤ 純粋な芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担っているという自覚と誇り。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人は、よき心をもち、善き事をせまほしきわざに［　A　］ある。

今は二十年あまり昔の事なりけるが、江戸の大橋のこなたなる、ある船宿の主、ある夜、夜更けて、ものよりかへりけるに、橋の上に人ありて、身を投げむとするさまなりければ、走りつきて抱きとめぬ。見るに、まだ十あまり四五つの少女なりければ、「何事ありてしかるぞ」と問ひけるに、「われは、鞘町といふ所の、某の家に、児守るみやづかへをしつる身なるが、わが母も、この頃、おなじ家にやとはれ来てありけるに、主の君の置き給へる金三十両、時の間になくなりぬ。何人の盗みつるかは知られねど、わが母に疑ひかかりて、今は言釈も立てがたく、母なん、その盗人になりぬべきさまなりければ、[1]ぬれ衣き給はむ事のかなしさに、われその盗人になりて、身を投げむとするなり。なさけあらば、身を投げさせて[2]給はれ」とぞ、いひて泣きける。

船主、「あはれなる事かな。さらば、われ、その金出して与へん。わが家に来よかし」とて、将ては来にたれど、この家も貧しくて、その金いかにも与ふべきよしなし。さればとて、一たび助けて、また出だしやるべくもあらじと思ひわびゐたるに、家の妻いひけるやう、「われは、もと川竹*のながれの身なれば、もとの主人に乞ひ願ぎて、その金かりうけ、また三年もうき瀬に落ちてん。[3]よしや憂しとても、人ひとりの命にかへなば、それも何かはいとはん」とて、翌朝、その金を乞ひ受け、与へて少女をかへしぬ。

その後も、「いかがしつらん」とは思へど、もののまぎれに、[4]主の名も問はざりければ、尋ねんともせず。二月、三月を過ごしつるほどに、ひと日、客人の従行して、永代といふ橋の頭にさしかかりけるに、かの少女、跡よりおひ来て、袖をひかへ、「近曾は、君の御なさけにて、[5]死ぬる命を存へぬるのみかは、母のなき名をすすぎつる事、[6]かたじけなしとも、うれしとも、[7]きこえまつらん言葉も侍らず。とみに、この悦びもきこえ奉るべき事なるを、母もおもき病にしづみ、わが身もそれをいたはりて、けふまで遅れつるほどに、かの盗人ほかにありきとて、金三十両、もとつ主人より返し遣はしにければ、今日こそよろこび

に参りたれ。いざ、かへらせ給ひてよ。種々、きこゆる事侍り」といふに、三人の客人も、「さる事ならんには、げに、いふ事もありなん。跡より来よかし。しかじかの家にて待ちなん」といひて、ゆきけり。

をりしも八月の十九日、深川なる八幡の神の祭りの日にて、物見る人もあまた群参きければ、ゆくも、とみにはわけあへず。しばし圧され、たゆたひてあるほどに、おもほえず橋崩れ落ちて、かの三人の客人は、あへなく底のみくづとなりにけり。「われも、この少女に袖引きとめられ B 、ともに落ちて死せましを、先つ月は大橋にてこの少女を助け、けふはまた、永代橋にてこの少女に助けられけるは、いかなるちぎりかありけん」とて、家にかへりて、事なく妻をよびかへし、めでたき身となりつる事もありき。

この船主のこころざし、天地の神も、むなしくなし給はめや。たれも、よき心をもちて、身のほどほどに、善き事はせまほしきわざにこそ。

（橘守部『待問雑記』による）

（注）＊川竹のながれの身―遊女であった意。

問一　空欄 A に入れる言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 18 。

① こそ　② とて　③ や　④ か　⑤ ぞ

問二　傍線部1「ぬれ衣き給はむ事」とはどういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 19 。

① 自分が、母に代わって身を投げようとしていること
② 自分が、盗人になってしまいそうであること
③ 母が、盗人の被害を受けそうであること
④ 母が、無実の罪を負わされてしまうこと
⑤ 母が、川に身を投げようとしていること

問三　傍線部2「給はれ」は、誰に対する敬意を表現しているか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 20 。

① 主の君　② 船宿の主　③ 母　④ 少女（をとめ）　⑤ 盗人

問四　傍線部3「よしや憂しとても」の意味として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 21 。

① 一度助けたはずの相手を追い出すのはやりきれないことだが、しかし、それでも
② かつての主人に頼み事をするのは屈辱的でいやなことだが、しかし、それでも
③ 大きな借金をすれば、どんな苦労をするかわからないが、しかし、それでも
④ 盗人の疑いをかけられるのは悲しいことだが、しかし、それでも
⑤ 再び遊女の勤めに出るのはつらいことだが、しかし、それでも

問五　傍線部4「主の名も問はざりければ、尋ねんともせず」は、誰のどのような人物像を表現しているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 22 。

① 少女の、純真で世間知らずな人物像
② 船宿の主の、善良でおうような人物像
③ 少女の母の、弱々しく頼りない人物像
④ 船宿の主の妻の、楽天的で明るい人物像
⑤ 少女の主の君の、育ちはよいが無責任な人物像

問六　傍線部5「死ぬる命を存(ながら)へぬるのみかは」の意味として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 23 。

① 仮に命が助かることだけはなかったとしても
② 命の危うい病から、回復することができたことだけでも
③ 危うく死んでしまうところを、生きのびただけではなく
④ 死にそうなところを助かったという程度の問題ではなく
⑤ 一度は死んでしまったのに、生き返らせてもらったようなものであり

問七　傍線部6「かたじけなし」の、ここでの意味として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 24 。

① ありがたい　② おめでたい　③ 不思議である　④ 危険である　⑤ ありえない

問八　傍線部7「きこえまつらん言葉も侍らず」の意味として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 25 。

① おうかがいしたいこともございません。
② 存じ上げている事柄もございません。
③ お願いする筋合いでもございません。
④ お話しできることもございません。
⑤ 申し上げる言葉もございません。

問九　空欄 B に入れるのに、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 26 。

① たりけるには　② たらましかば　③ ざらましかば　④ たりしかば　⑤ ざりしかば

問十　傍線部8「ちぎり」を漢字に直せ。**問十は解答用紙（その2）を使用。**

問十一　この文章の内容に合っているものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄は 27 。

① 船宿の主の妻は、以前と同じ遊女の身に戻ったが、こんどは三ヶ月ほどで遊女をやめることができた。
② 少女（をとめ）の主の君は、船宿の主の妻のけなげな申し出に感じて、三十両の金を貸すことを承諾した。
③ 少女（をとめ）は、重病に苦しんでいた母を助けるために子守り奉公に出た、親孝行な娘である。
④ 三人の客人が永代橋の崩落で亡くなってしまったのは、過去の行いの報いであった。
⑤ 船宿の主は、日頃から天地の神を信仰していたので、神の加護によって助かった。